
ローケットは二度笑う。

竹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロークアットは二度笑う。

【Nコード】

N9874X

【作者名】

竹

【あらすじ】

(*谷) > 入りや

てふてふと、彼を取り巻く人々のショートストーリー。
大谷さん中心にちょこちょこ書いてます。連載とは名ばかりで短編集と化しました。愛し愛され恋い恋われ…とにかく大谷さんです。修道やらBで始まりLで終わるのが平気な御方はご賞味あれ。追記：リクエスト随時受け付けてます。

パーマグラネットに曝いて。

大谷さんとみんなでキスネタ

髪

豊臣秀吉×大谷吉継

「髪にも香を染み込ませたのか？」（貴様の香りが離れない）

髪（思慕）

額

竹中半兵衛×大谷吉継

「少しは休んで。ね？」（君も幸せになれるんだよ）

額（祝福）

臉

真田幸村×大谷吉継

「大谷殿は石田殿のことをよく見て居られるでございませぬ。」（某のこととは見ないのに）

臉（憧憬）

耳

松永久秀×大谷吉継

「卿は、自分の幸せを願うことはないのかね？」（私が叶えてあげようか）

耳（誘惑）

鼻梁

お市×大谷吉継

「蝶々さん、かわいい…」（市の、もの…ふふ）

鼻梁（愛玩）

頬

前田利家×大谷吉継

「こんなところにまつご飯が！」（貴殿と食べる飯はうまい）

頬（親愛）

頬2

まつ×大谷吉継

「あれ、ご飯粒が。」（貴方様の笑顔でまつもお腹いっぱいになる）

のでございます)

頬2 (満足感)

唇

(鏡の中の) 大谷吉継×大谷吉継

「ヒ、ヒ…ぬしなぞ、誰も愛さぬ。」 (泣くなナクナ、我が慰めて
やる)

唇 (愛情)

喉

織田信長×大谷吉継

「我以外と交わす言葉が必要か？」 (いっそのまま食い千切って
しまいたい)

喉 (欲求)

首筋

伊達政宗×大谷吉継

「蝶と竜が、悪くねえ。」 (今からお前は俺のもんだ、
you s
ee?)

首筋 (執着)

背中

片倉小十郎×大谷吉継

「次逢つたら…いや、良い。」（今はこれが夢でないと思いたい）

背中（確認）

胸

石田三成×大谷吉継

「刑部、どこにも行くな。」（離れるな、ずっとだ。この先未来永劫、私は貴様と共に在る）

胸（所有）

腕

前田慶次×大谷吉継

「アンタが恋してる話は、あんまり聞きたくねえんだ。」（しがみついて格好悪くても、アンタが好きだと言いたかった）

腕（恋慕）

手首

長曾我部元親×大谷吉継

「海賊つてなあ欲しいもんは力尽くで手に入れるってもんよ」「ア
ンタの過去も未来も俺が奪う」

手首（欲望）

手の甲

風魔小太郎×大谷吉継

「…」（お疲れ様です）

手の甲（敬愛）

掌

徳川家康×大谷吉継

「刑部も天下も三成も、なんて…ワシは虫が良すぎるな。」（今だ
けその手の中で泣かせて）

掌（懇願）

指先

雑賀孫市×大谷吉継

「手まで動かなくなつた訳ではあるまい？」（この手が守り抜いて
きたものは一体いくつあるのか）

指先（賞賛）

腹

本多忠勝×大谷吉継

「ギューーン。」（もう痛くはないのだろうか…。くすぐったそうに頭を撫でられた）

腹（回帰）

腰

黒田官兵衛×大谷吉継

「どうだ刑部！これで逃げられねえだろうか？」（枷の代わりに小生が捕まえてやる）

腰（束縛）

腿

毛利元就×大谷吉継

「貴様は私の蝶よ。」（このまま籠に閉じ込められたなら…）

腿（支配）

脛

猿飛佐助×大谷吉継

「仰せのままに、ってね。」（アンタのために、動いてあげる）

脛（服従）

足の甲

小早川秀秋×大谷吉継

「僕は、貴方の道具だよ。」（愛じゃないことくらい、分かっているつもり）

足の甲（奴隸）

爪先

天海×大谷吉継

「ふふ…貴方のことは、全て分かっていますよ。」（私の全て、ああ刈り取ってしまうのが惜しい）

爪先（崇拜）

置き去りピップ。

大谷さんとみんなでキスネタ（入らなかった人たち版）

額

武田信玄×大谷吉継

「むうん、ちと軽すぎではないのか？」（幸にも不幸にも押し潰されぬようにワシが抱えよう）

額（祝福）

瞼

北条氏政×大谷吉継

「ひよっひよ！睫毛がついていたのじゃ」「（今ばかりは風魔も呼べぬのう）

瞼（憧憬）

耳

明智光秀×大谷吉継

「私と共に来ませんか？」（地獄の果てまでご案内しますよ）

耳（誘惑）

鼻梁

島津義弘×大谷吉継

「おまはんは、むぞらしかね」「そしてべらじい」

鼻梁 (愛玩)

頬

鶴姫×大谷吉継

「ほらほら、もっとニコッてして下さい」「表情一つでも未来は変わるんです」

頬 (親愛)

頬2

いつき×大谷吉継

「おめさに、頼っても良いんだべか?」「その腕の中は安心できるだ」

頬2 (満足感)

喉

宮本武蔵×大谷吉継

「なあ、おれさまと勝負しろよ。」（勝ったらそんな時は…）

喉（欲求）

首筋

今川義元×大谷吉継

「不思議でおじゃる…」（麿の素顔を晒しても、良いと思った）

首筋（執着）

背中

最上義光×大谷吉継

「我輩は、貴殿の名を呼ぶよ。」（吉継、吉継…間違えようもないね）

背中（確認）

胸

上杉謙信×大谷吉継

「うつくしきちょう」「たいへのよがおとずれたら、かくごなさい）

胸（所有）

手首

大友宗麟×大谷吉継

「貴方も愛を知るべきです。」（僕の愛を受け入れて）

手首（欲望）

手の甲

浅井長政×大谷吉継

「市が世話になっているようだ。」（この者に幸多からんことを）

手の甲（敬愛）

掌

ねね×大谷吉継

「秀吉さまを、お願いね。」（寂しがりやで意地っ張りなのは貴方と一緒に）

掌（懇願）

指先

かすが×大谷吉継

「謙信さまがお前のことを言っていて居られた。」
「誰よりも幸せになるべき者よ。」

指先（賞賛）

置き去りピップ。(後書き)

地方武将：すまん、キャラが分からない。

最後担当のかすがちゃんでしたが、
あれは私の願いでもあります。

みなでもみくちゃんに愛してあげて下さい。

島津どんの方言について

むぞらしかね 可愛い
ぐらしい 可哀想だ

間違っていたらご一報下さい。

パンプキンの憂鬱。

大谷さんとお菓子と悪戯

伊達政宗の場合

「Trick or treat?」(菓子が無いならアンタを食らう)

真田幸村の場合

「と、とりつく…お、あ…鳥?」(よくは分からぬが、団子を貰えただござる)

徳川家康の場合

「トリック・アンド・トリート」(ワシはお菓子と刑部が欲しい)

石田三成の場合

「刑部」(菓子はいらん貴様を寄せ)

長曾我部元親の場合

「Trick or treatッ?」(あてっ、ちょ、豆は投げんじゃねえっ!)

毛利元就の場合

「Trick or treat」(餅か。悪くないな)

前田慶次の場合

「えーっと、Trick or treat?」(え、もう食っちゃった?…そ、れは食べても良いつてことには…)

黒田官兵衛の場合

「Trick or keyだ!どうだ刑部、小生は賢いだろう!」(鍵がなきゃお前さんと食っちゃまっぞ)

パンプキンの憂鬱。(後書き)

みっちゃん、せめてTrick or treatは言おう！…！…！

やきもちストロベリー。

三吉

「いっそのこと窒息しろオオオオ!!」

耳をつんざくような怒声が聞こえ、我はまたか、と肩を竦めた。

家康との対立から、三成はやけに怒りっぽくなったと思う。

無論、前々から神経質なところがあつたのは分かっているが、

それにしただって怒るおこる…。

『いつの間に莫迦を通り越した?』

『刀狩りだ。利き腕と共に刃を差し出せ。』

『いいだろう…気の済むまで斬滅してやる!』

探せばいくらでも出て来る。

「はあ。」

小さく吐いた溜息は三成の「家康ウ!!!」にかき消されていく。

「三成、三成。」

くんつ、と三成の袖を引っ張って我に気付かせた。

「いえやs…どうした刑部。」

袖にやったのとは別の手を三成の頬に置き、

「…我を窒息させてみせ。」

そう言った。

しばらく石のように固まっていた三成が、ゆっくりと我に覆い被さる。

本当に窒息するのではないかと思う程の長い間、唇を重ね、酸素を奪い合い、舌を絡める。

苦しくなって逃げようとしても、三成の手がそれを良しとせなんだ。
飲み込めなかった唾液がつう、と糸を引く。

口を離して、浅く息を吸って、今度は触れるだけの口吸いをした。

(…家康に妬いたのか?)

(トト…さあて、我にはとんと分からぬな。)

タンジェリンは喋らない。

官吉

『君たちは本当に仲が良いね。』

銀髪をなびかせた男がそう言ったのは、いつのことだったか。

少なくとも、小生に枷が付く前だ。

『ケツ！刑部と仲良しこよしに見えるか？』

投げつけられた泥団子を払い落としながらそう答えた。

仲が良いなんて、どう見たって考えられないだろうに。

元服も済ませた野郎同士に、ケンカするほど、
なんて言葉は似つかわしくない。

刑部はただ小生を苛めて楽しんでやがるんだ。

『嫌いじゃないくせに』

その言葉には、なんと答えたのか。

もう思い出せなくなっていた。

「暗、憂い事か？」

鉄球に腰掛けていた小生を数珠ですつ転ばせた刑部は、ケタケタと笑っていた。

「ああそつだよ。なんでお前さんはそんなに素直じゃないのかと思つてね！」

あの時のように土に塗れて、器官に入った砂を咳と共に吐き出した。

「素直も何も、ぬしが嫌いだからよ。」

「小生だつてお前さんなんか嫌いだね。」

「トウゼンである、病患いを好くとすれば、ぬしはそついう性癖なのかと疑いたくなるわ。」

「そついう考え方が嫌いだつて言っているんだ。」

「どちらにせよ嫌いなのである？」

「あー嫌いだね！」

『嫌いだったら、わざわざ構ったりしないだろう？愛情の裏返しは無関心だよ。』

『好いているから、お互いに嫌いだなんて言い合えるんだ。』

『少し、羨ましいよ。』

半兵衛の言う事は、知性派の小生にも理解し難かった。

けれど、

「嫌いよ。」

「嫌いだ。」

そう言い合えなくなると思と、チクリと胸が痛んだ。

泣き虫マンゴー。

官吉

「ヒビ、ヒッ……!!」

愉快で仕方が無いと言うように、刑部は笑う。

だが、こんな笑い方をしてる時、あいつは不機嫌だ。

障子一枚で仕切られた部屋の外と中。

城の離れ、仕事以外で訪れる者の少ない部屋。

そこで刑部は笑う。

(寂しいのか)

よく、そう思う。

刑部がああやって一人閉じ籠って笑う時、三成は必ずと言って良い程、居ない。

わざわざ居ない時を狙って笑うものだから、てっきり居なくなってるのかと思いきや、

実は逆だ。

(寂しくて)

寂しくて寂しくて、そんな自分が滑稽で、笑うんだろう。

「ふ、ふ……っ、ひ…」

そうしてもっと寂しくなって、

「…暗、いつまでそこに居るつもりか。」

小生に当たり散らすんだろう？

カタ、リ

やや滑りの悪い障子を開いて、枷のはまった腕の中に刑部を閉じ込める。

「お前さん、泣き方を間違えてるよ。」

引きつり笑いが固まって、また、始まった。

けれど、刑部は小生の腕から逃げ出さない。

「ヒ、ヒ……！暗あ、我が泣いていると？どう見ても笑っておる。」

確かに一滴の雫すら流れた様子はないし、目だって赤くもなんともない。

でもそれは、刑部が上手く泣けないから。

いや、ずっと泣き続けて涙が枯れたのか？

刑部を抱き締める腕に、少しだけ力を込めた。

このままもつと力を込めれば、こいつの細っこい体なんてポキリと
いっちまう。

ケタケタと笑っていた刑部の脛に、

ちう

と、小さな音をたてて唇を落とした。

「……なんだ、お前さん、ちゃんと泣けるじゃないか。」

透明な雫を降らすこいつは、きっと誰よりも人なんだろう。

泣けるように、小生が居てやるから。だから、

（だから）

「ほら、笑え。」

バナナの勘違い。

毛谷

ほんの興味だった。

サンデーの名残りのせいだと、言い切ってしまったかった。

けれど、できない。

事の発端は、大谷との茶会。()という名の悪巧み()

「大谷、一つつまらぬ事を聞くぞ。」

「あい？」

「そう、愛についてよ。」

あの時の大谷のポカンとした表情すら、鮮明に記憶に残っている。

「貴様は誰ぞ懸想をする相手は居るか？」

「同胞、急になんの「答えよ」

…居る訳無かる。」

「そうか。」

訝しげに首を傾げる大谷に、更に問うた。

「大谷、愛とはなんだ？」

「ぬし、誰ぞ良い人でもで「なんだ？」

…そ奴を大切にしたい、とかそういう気持ちである。」

また台詞に被せて来おつて、と毒づく大谷だったが、我は気にしていなかった。

「大切にしたいと思う事が愛か？」

「知らぬわ。愛は人それぞれの型があるらしい。」

「…では、相手を喰らいたいと思うのは、愛か？」

「同胞よ、色恋の話なら前田の風来坊にでもしやれ。我が分かるはず無かる？」

盛大に溜息をつく大谷の肩を掴んで、床に叩きつけるように覆いかぶさった。

「も、うり…?」

「これも愛の型だろう?」

白頭巾がズレて口元が露わになる。

水分が足りていないのか乾いて見えるそれに口を寄せ、チラと相手の顔を見た。

(さすがに泣きはしな——っ!?)

まさかの赤面だった。

これから来るであろう感触に備えて、眉間にシワがよる程きゅっ
と目を瞑り、
手も硬く握られて居る。

「…?」

いつまでも反応のない我に、大谷はようやく目を開けた。

「悪ふざけが過ぎるわ。」

ふい、と逸らされた顔。

まじまじと見つめていれば、居心地が悪そうにもっと逸らす。

思わず、その姿が（愛い）などと思った我に頭突きを食らわせてやりたい。

ふ、と小さく笑んで、我は大谷を解放しようとした…が、体は正直だ。ピクリとも動かない上にこんなことをのたまった。

「悪ふざけ、そう思うか？」

びく、と小さく揺れる肩。行き場を失った様に左右に振れる瞳。何か言いたげに開く唇…

「や、やめよ。同胞、」

ぐい、と顔を近付けて、片手を下へ。

「何をだ。」

疑問符を置いてけぼりにして、腿の辺りをサラ、と撫でる。

「っ、ふ…われに、触れること、を…！」

「我慢ならないか？」

下腹部の中心をトン、と突けば「ひっ」などと小さく啼く蝶。

その首筋に舌を這わせたところで、邪魔が入った。(いや、助けか？)

「毛利さま」

刻を告げに来た捨て駒により、我は正気を取り戻す。

「…しばし待て。」

大谷から退き、手を引いて起こしてやる。

お互いに無言で、どう声をかけたものか分からず、情けなくも我は突っ立ったままだった。

(謝罪の言葉を――)

謝らなければ、今後関係が悪くなりかねないというのも承知していた。

しかし、謝りたくなかった。

結局、何も言い出せぬまま船に乗り、安芸へ帰った。

(ときとき)

(可笑い)

(とくとくとくん)

(医者を呼ばねば)

(きゅっ)

「ええいなんだと言っただッ!」

心の臓が、音が、鳴り止まない。

「くそっ」

(こんなもの)

(計算し切れぬ…ッ!…!)

(傍に) (もう一度触りたい) (笑って) (我だけに) (我の)
あの時の感覚が) (心の臓がもたない) (たすけ) (て)

言い訳を考えては打ち消して、くらくらと逆上せた頭の中。

なぜ問うた？

(懸想をする相手は居るか?)

居ないと聞き、安堵した。

(愛とはなんだ?)

貴様が望む愛が知りたかった。

(悪ふざけ、そう思うか?)

気付いて、欲しかった。

(莫迦か) (触れてから、我が気付くとは...)

きゅつきゅくと締め付けられるような胸の痛みが、より一層増した
気がして、我は無意識に大谷の名を呼んだ。

バナナの勘違い。(後書き)

この二人は百合っぽいなと思ったりします。

すれ違いメロン。

官吉、家三前提の官三と家吉

誰も報われない。枷なしかんべ。豊臣時代。大谷さんはまだ歩ける。

以上が許せるお方はどうぞ、お口汚しを…

誰もいないと思って居るのだろうか。

薄暗い廊下を手を繋いで歩く家康と三成は、傍目からは幸せに見える。

ただし、傍目からなのだ。

「ヒ、ヒ…あ奴らは仲が良いなあ。」

小生の隣の恋人は、対抗でもする気が手をそっと触れさせた。

その手を握って、

「ああ、そうだな。」

と、適当に返して、小生は見慣れた銀髪を目で追った。

「お前さんも人が悪いな。」

「貴様に言えたことか？」

何も身に付けず、肌を合わせる。

銀髪を撫でれば、気持ち良さそうに目を細める、こいつは、

「どつという意味だ？三成。」

家康の恋人だ。

けれど、今の小生たちも傍目からは恋人同士に見えるだろう。

「刑部に目をやらなかった貴様に、言われたくは無いな。」

「そうだったか？」

「ふん、最低だな。」

「どつちが。」

次の言葉を待たずに口を塞いでやれば、くぐもった声が耳についた。

「は、あ、かんべ、え、もう一回だ。」

「綺麗な顔して、ほんつと淫乱だな。」

「家康の前じゃこうにもいけないからな。」

「同衾もまだか。」

「何も知らぬフリというのも疲れる。」

どちらからともなく口付けて、夜を過ごした。

「暗、昨夜は…どこに居た。」

ギクリとした感覚なんて、とつ^づの昔に忘れた。

「ああ、悪いな。終わらせたい仕事があったから籠ってたんだ。」

知性派と言っただけあって、仕事と言えば疑われないことを、小生は知っている。

「そうむくれると、可愛い顔が台無しになっちまうぞ?」

わしゃわしゃと髪を撫でれば、まだ文句を言いながらもその口調は和らぐ。

ああ、よかった。今回もやり過ごせた。

内心で安堵しつつ、本当に仕事があったことを思い出して手を離れた。

その時、刑部が小さく「さよなら、よ」と言ってたなんて、知らなかった。

「三成。」

うざったいほど明るい笑顔で、私の名を呼ぶ。

「ほら、ここ寝癖が付いてるぞ。」

「直す時間が無かった。」

官兵衛と居たから、なんてもちろん言えないが。

「そ、その…そういう三成も良いな！あ、いや、可愛いと言っか新鮮と言っか…」

「抜かせ。」

「本当だ！三成は可愛い！！」

言い切る家康は、私と官兵衛の関係を知ってもそう言えるのだろうか。

照れたフリをして、後ろを向き歩き出した。

だから、見えなかった。

家康の笑顔が苦しげに歪められていたなんて。

「刑部。」

「三成か。」

廊下ですれ違った刑部は、いつも通り私に笑いかけた。

「部屋へ戻るのか？」

「ああ。」

貴様の官兵衛が待っているからな。

これも言えないが。

「刑部はどこへ行く？」

「我はちと太閤の元へな。」

「相変わらず、秀吉さまはお前をしっかりと評価して下さっているのだな。」

「なに、それはぬしらも同じである？」

家康と私が一緒だと？

それは違つと言いたかったが、黙っておいた。

「ではな。」

「ああ。」

刑部が私の横を抜けた。

貴様なら、すぐに気付くと思っていたのだが、見込み違いか。

嘘だった。何もかも。

太閤の元へなど行かぬ。

あれは、ただのその場しのぎ、三成から離れたかった。

友だと思っていた、恋人だと思っていた。

けれど、それもマコトではなかった。

離れたくて、一人になりたくて、会いたくて、廊下を駆け抜ける。

「……!!」

「おっと」

角でぶつかってしまったのは、家康だった。

「刑部がそんなに慌てているなんて珍しいなあ！」

ぼん、と肩に置かれた手。

この手だって、三成に触れたいに違いないのに。

「家康……」

「うん？」

「なぜ、こうなってしまうのだろう。」

ポタリ、ポツ、ポツ

声は出なかった。

ただ目から溢れる水を止められないままだった。

「大切だからこそ、気づいてしまっただな。」

「ああ。」

「だが、それでもワシは繋がりが欲しかった。」

「……」

「だから、ワシは……」

「……ん。」

「気づかないフリをするんだ。」

我は、ぬしをただの阿呆と思っていた。

違う。

ぬしは、誰よりも聡く、悲しき男だ。

自分を見ているような気になって、家康を抱き締めた。

それに合わせて、我を抱き返す家康も、泣いていた。

(我はただ)(こつやって抱き締めて欲しかった)

その日の夜に、秘め事が増えた。

互いに目隠しをして、

「家康」

「刑部」

名を呼んで、傷を舐め合う。

愛しい人の名を伏せて、愛しい人への愛の捨場に、互いを選んだ。

満たされない、カラカラの何かがヒビ割れて壊れる音がした。

すれ違いメロン。(後書き)

あるえ、大谷さんが幸せじゃない…マイガッ!!

チェリーは小さく爪を噛む。

すれ違いメロン。の続き

秘め事は、それからずっと続いていた。

官兵衛と三成が共に居る時に、我は家康に縋り、家康も我を求める。

滑稽よな。

家康が触れたいのは、三成だと言うのに…それが触れるのは、

醜い我なのだから。

笑いもできぬ。

『刑部、つ…平気か？』

我を抱く時、必ず家康は心配をした。

無理をさせていないか

痛くはないか

何度も問う。

(けどそれも全て)

三成に宛てたものなのである？

だから、我は、もう終わらせてしまいたかった。

(暗)(暗)(く、ら)

ここ最近、やけに家康の機嫌が良い気がする。

だが、私は何かした覚えは何も無い。

なのにどうしてあんなに笑っているんだ？

ぼうつとしたまま歩いていたところ、見慣れた白頭巾が廊下に現れた。

「刑部か。」

「三成か、朝餉は取ったか？」

「いらん。」

いつも通りの会話をして、そのまま横を抜けようとした。

「三成。」

ぴたり

その声に合わせて足を止める。

やはり、貴様は気付いて居たのだな。

「三成…」

「なんだ。」

刑部の声は震えていた。

「三成。」

「だからなんだ？」

「…頼む。」

振り返らない。

けれど、刑部は泣いているのだろう。

刑部がそこまで執着するのは、私ともう一つしかない。

「……あ奴を、返してくれやれ……」

やはり、官兵衛か。

「刑部、一つ勘違いをしていないか？」

「…？」

「返せも何も、あいつは自分で私を選んだ。もう貴様のものではない。

違うか？」

私は官兵衛に好意など抱いていなかった。

それは向こうも同じで、だから共に居たのだ。

「貴様なら分かるだろう？」

振り返れば、刑部は背を向けて俯いていた。

ここまでしておいて、心が痛まぬと言つのも可笑しな話だ。

むしろ、勝ち誇つたような気分さえする。

「そうよな。」

声を絞り出して、刑部は言った。

「…あ奴は、ぬしを選んだ。…すまぬ。」

その言葉を聞いて、私は歩き出す。

今、刑部が一番会いたい奴に会うために。

「聞け、官兵衛。」

「なんだ？」

「刑部に会った。」

わざわざ三成が報告するくらいだから、何かあったんだろう。

「どうかしたのか？」

「世間話だ。」

「刑部が？」

まあ、三成相手ならあり得ん話でもないが…

「その後、言われた。返して、と。」

楽しみに笑う三成と、言われた事に対して何の感情も湧き上がらない小生。

「そうか。」

「それだけか？」

冷めた奴だ、と呟きまた笑う三成の頭を撫で、抱き寄せる。

「良いのか、帰らなくて。」

「今帰っても数珠が飛んでくるだろ？」

「それもそうだ。」

抱きしめたのも、接吻をしたのも、抱いたのも、笑顔を見たのも、好きと言ったのも、名を呼ぶ事さえ…

もう思い出せないほど遠い記憶になっていた。

忘れたのは、小生に愛がなかったからか？

それとも、

脳裏を過った考えは、快樂に飲み込まれて行った。

「帰ったか。」

部屋の前には、刑部がいた。

「おう、ただいま。」

ひら、と手を上げて中へ入る。

動こうとしない刑部を招き入れて、座らせる。

「なんか用か？」

「用が無くては来てはならぬのか？」

恋仲なのに、と薄ら笑いを浮かべる刑部は、儂げかつ、妖艶さを醸し出していた。

「まあ、用もあるが。」

「仕事なら断るぞ、お前さんの寄こすのは酷いのばかりだ。」

「ヒ、ヒ……ワザとに決まっておる。」

いつもいつも遠くにはかり行かせやがって、と刑部を軽く睨みつければ、

肩を竦めてはあ、と息を吐いた。

「……どんなに遠くにやっても、ぬしは帰って来て我に文句を言いやる。」

「当たり前だ。」

「……そういうところを、好いておった。ずっと前から。」

すす、とこちらにやって来て小生に寄りかかり刑部。

(こんなに細かったか?)

触れたら、壊れてしまう気さえ、した。

「暗、我は、誰かを慕うという気持ちがよう分からぬ。」

「ああ。」

「だから、どうすればぬしが喜ぶのかも、我の元に帰って来るのかも、分からぬ。」

「…おい、何言って」

「そうである、ぬしは、我から離れるばかりよ…好いても、好いても、

…我を見てはくれなんだ。」

俯いて表情の見えない刑部に触れようとした。

けれどそれは、最後に残っていた良心が咎めた。

(汚い手で触るな、ってか。)

自分の心と体の動きが噛み合わない。

「すまぬ、…こんなことを言いつつもりは無かった。最後に、一つ頼まれてくれぬか？」

やはり、反応するより前に体が動いて、小生は頷いていた。

「ぎゅ、って、しゃね…」

気恥ずかしそうに笑う刑部に、どうしてか涙が零れた。

「借りるだけ、よ…今だけ。」

貸すとか借りるとか返すとか、そんな言葉が聞きたかった訳じゃないのに。

小生は無言で刑部を抱きしめた。

「…あたたかい、なあ…くら。」

「ああ」

「久しぶりよな。」

「ああ」

気の利いた台詞の一つや二つ、かけられないもんかね。

小生は、こんな時ばかり臆病だ。

「…好きよ。」

「…」

「…すまぬ。」

好きと返せない、謝るべきなのに、言葉が出て来ない小生。

「暗。」

「…吉つ、ぐ…」

「ぬしは、優しいなあ…」

ああ、そうか。

小生が三成を見ていた時、お前さんも小生を見ていてくれたのか。

遠くにばかりやったのは、三成から離れたかったから、

そんで、文句を言いに小生が自分のところに来るようにしていたんだな。

今更気付いたって、もう遅いんだろう。

刑部の涙すら、拭えない。

チェリーは小さく爪を噛む。(後書き)

本当はこの後に三成と家康のターンが待っていました。あまりにも報われなくて私の心が折れました。

…希望されたら、書こうと思います。

やっぱり報われませんが、それで良いなら…

みたらしピーチ。

吉幸吉

童話っぽい。幸村が姫。

姫は、憂鬱でした。

なぜならば、この世界では姫だから。

戦には当然出してもらえず、ただ結婚して子を成すためだけに生まれたようなものでした。

だから、目の前に悪い魔女が現れた時、姫は抵抗せずに捕まったのです。

「外の世界は、こうなっているのでござるか！」

「街一つで騒がしい姫さまよな。」

「連れ出したのは貴殿でしょう。」

「攫ってくれと言ったのはどこの誰だったか。」

魔女は、足が悪いらしく、ふわふわの空飛ぶ絨毯に乗っていました。

心のきれいな者でなければ乗せられないなんて嘘を言って、姫を乗せようとしませんでした。

けれど、姫とて頭を使います。

「こつすれば乗れるではありませんか！」

魔女の膝に乗って誇らしげにそう言うと、驚いた魔女は仕方なく

姫を膝に乗せたまま、空を飛びました。

「きれい……」

ついに国から脱出してしまった姫は、夕焼けに照らされる国を見て、そう眩きました。

さあ、姫を自分の城へ連れ帰った魔女は準備に取り掛かります。

この姫をダシに、やって来た者たちを逆に捕まえ、身の回りのことをさせようと思ったのです。

有能なものが手に入れば、姫を国へ返すはずでした。

けれど、姫が魔女の世話をしてしまうので、それは叶わなくなってしまうました。

「姫、本が読みたい。」

そう言えば姫はたくさん書物を抱えて来てくれるのです。

「姫、少し寒い。」

そう言えば、姫は暖炉に火を入れてくれるのです。

「姫、腹が減った。」

こればかりは姫にはできず、魔女がすることになりましたが。

それでも魔女は、姫との生活を好きになりかけていました。

だから、姫がこの城から出ていかないように様々な持てなしをしました。

姫が飽きないようにドラゴンを遊び相手にし、戦わせてあげました。

それなのに、

「魔女殿、某はそろそろ誰かと手合わせがしとございます。」

姫がそんなことを言うものだから、魔女は困ってしまいました。

仕方なく、姫の情報を掴んでやって来た暗という奴と戦わせてみました。

驚くことに姫が勝ってしまったのです。

「姫、楽しいか？」

「はい！」

嬉しそうに笑う姫を見ると、魔女は心臓の辺りが痛くなるような気がしました。

暗には国へ帰ってもらいました。

そのため、姫を取り返しにやって来た者が姫の返り討ちに遭うという事件は、

国中に知られてしまったのです。

「あの princess はどうやら魔女に操られてるんだな？」

さすらいの旅人は、そう勘違いをして魔女の城へと向かいました。

やはり同じように姫が相手をしましたが、この旅人、かなりの腕前です。

お互いに一步も引かぬ戦いが三日三晩続き、ついには姫が負けてしまいました。

「姫!!」

魔女が姫に駆け寄ります。

姫はもう、虫の息でした。

魔女は最後の力を振り絞って、姫に魔法を掛けました。

姫を救うことと引き換えに、姫を運命の人のキスでしか目が覚めないようにしたのです。

目が覚めた時、姫の時間は動きだし、目の前には運命の人が居る、

そうならば良いと、もう魔法を使えなくなった魔女は思いました。

最初のキスは、あのさすらいの旅人でした。

二人のキスを見ていると、とてもお似合いで、魔女はもっと心臓が

痛くなりました。

けれど、姫は起きません。

旅人は帰って行きました。

それから何十年が過ぎても、姫の運命の人は現れませんでした。

魔女は焦っていました。

自分の寿命が近いことを悟っていたからです。

皺くちやの手で姫の柔らかい頬を撫で、魔女は泣きました。

あの時、自分が城から連れ去らなければ、と、後悔しました。

魔女は最後の日、姫の眠るベッドに腰を掛け、その手を取りました。

「姫。」

もう一度だけでも目を開けてくれたなら…

魔女は悲しげに笑いながら、姫の手の甲に唇を落としました。

びく

と、微かに姫が身じろぎしたような気がしました。

ぼやける視界の中で、姫の笑顔だけが輝いているようでした。

「…最期に、良い夢を見た。」

「某を置いて、勝手に死なないで下され、魔女殿。」

姫はそう言いながら、目を閉じる魔女に口付けました。

するとどうでしょう。

魔女は死の国から連れ戻され、みるみるうちに若返っていくではありませんか！

「これは…」

驚きのあまり声のでない魔女に、姫が言いました。

「魔女殿が某に掛けた魔法のお陰で、某も少しだけ魔法を使えるよ

うになったのでござる。」

「…我は、ぬしは運命の人のキスでしか目が覚めないようにしたのに…これは一体。」

「まだお分かり頂けないのでござるか？…某の運命の人は、貴殿でござる。」

耳を疑う魔女でしたが、その手は姫と繋がったままでした。

「某と共に、生きては下さらぬか？」

魔女は胸がいつぱいになり、ただ頷きました。

「…喜んで、お受け致すわ…姫さま。」

それから二人は未永く幸せに暮らしましたとさ。

みたらしピーチ。(後書き)

ご都合主義バンザイ!!

幸せにしかつたんだが、方向性を間違えたような気がする。

グレイプの夢日記。

官吉

現代転生とバサラ時代が入り交じり。現代によ谷さん。

こんな夢を見た。

「お前さん、誰だ？」

小生が入ると、少し窮屈な部屋に、一人の少女が居た。

「さあ、誰だつて良かる。」

ふむ、それもそうか、と頷いて、はて、と首を傾げた。

「ところで、お前さん、ここはどこかね？」

痩せこけて、頬の辺りがやや窪んだ少女は、こう答えた。

「病院よ。」

病院、なんだそれは、とやはり首を傾げるが、鼻を突くツンとした匂いに、

きっと薬師がいるところだろうと思った。

「お前さんは、どこが悪いのかね？」

どうしてだか足のある寝床の上にいる少女は、こう答えた。

「足と、肌が弱いよ。」

なるほど、だからそこから動けないのか。

布団に隠れてしまっではいるが、きっと足は包帯で巻かれているんだろう。

「お前さん、ずっと一人か？」

薄い桃色をした部屋で、ずっと。

首の辺りに管を通した少女は、こう答えた。

「……そうよ。」

そうか、一人か。

「なら、これから小生が見舞いに来てやるっか？」

夢だろうが、なんだろうが、これも何かの縁だろう。

ぼた、ぼた

「……もっと早うに、来やれ……ばか。」

その涙を拭おうと手を伸ばした時、少女の目が見えた。

それは、自分が最も憎み、嫌ったあの……

「……ら、……く……」

「ほえ？」

「…は官兵衛さまは今頃お目覚めのようです。」

嫌みつたらしく小生の頬やら前髪やらをぐいぐい引っ張るのは、

刑部。

「…もう、泣いてないんだな。」

ふと口を突いて出た言葉に、刑部は首を傾げる。

「いや、なんでもない。夢を見てたんだよ。」

少女は、もう余命が一年も無かった。

幼い頃から病弱で、たまの旅行に行けば事故で両親を失った。

友は、時々やってくる喘息持ちの三成と言う男だけだった。

少女は、前世の記憶を、断片的にだが、覚えていた。

(暗、暗…)

昔の自分は、きっとその(暗)が嫌いだったのだろう、とずっと思っていた。

薄桃色の部屋に移され、とうとう死を覚悟しなければいけなくなつた。

何一つ良い事がないまま、たった一人で。

そんな時、

こんな夢を見た。

ノックもなしに病室へ入ってきた男は、

「お前さん、誰だ？」

声、その形、手にはめた枷。

男は、自分の覚えている中の、暗、だった。

他愛もない疑問と返答のやりとりが繰り返されていく。

(暗、暗)

一つ質問が重なることに、自分は記憶を取り戻すのに、相手は、我が誰かと言う事すら、気付いていなかった。

「お前さん、ずっと一人か？」

一人になったのは、ぬしが居ないせいよ。

そう、言ってしまったかった。

「なら、これから小生が見舞いに来てやるつか？」

現世では、顔も見せぬくせに。

そんなに優しい言葉を掛けるな、やめやれ…

もっと我に時間があったなら、もっと我が健康であったなら、

「……………もっと早うに、来やれ……………ばか。」

目が覚めた時、眼瞼は腫れぼったくなっていて、ツン、と鼻の奥が

痛んだ。

「痛てててッ！ー！ちょ、おい、もっと優しくできんのかね！？」

廊下の奥で、ぎゃあぎゃああと騒ぐ声と、それを咎めるような看護師の声が聞こえた。

「もうっ、そんなに元気なら入院なんて要らないんじゃないですか？黒田さん。」

「痛い痛い！折れた骨があー！！」

現れたのは、両手を折って、まるで枷のように包帯を巻かれた、

暗だった。

（どちらにせよ、遅すぎるわ、暗め。）

グレイプの夢日記。(後書き)

この後、両手の使えない暗へあーんとか、キノちゃんの闘病生活とか、色々ドラマがあるはずですよ。

誰か代わりに書いてくれませんか…？

おこたの中のペア。

吉鶴

会話文です。

「大谷さん！今年も！大量の！みかんをつ！」

「落ち着け巫女殿……」

「これが落ち着いていられますか！寒いですが、寄ってください。」

「わざわざここに入る必要はあったか？」

「大有りです。寒いのは手足だけじゃないんですからね？」

「私のコタツが……ぐふえ、巫女殿、腹を押すな腹を。」

「もっつ、っ、どうしてこう言う時黙ってぎゅっとしてくれないんですか！」

「今ぎゅっとしたら我は何か出そうな気がしやる。」

「きゃああーあっち行って下さいー！ー！」

「押すなと言ったである。」

「いたっ！だからってどうして叩くんですか！？」

「悪いことをした子を撫でると言っつのか。」

「ええ、そうですー！さあー！」

「…はあ。」

「髪をぐしゃぐしゃにしないで下さいっ！」

「撫でて欲しかったのである？」

「もっとこう、優しくですー！」

「我には難しい相談よなあ。」

「えっ？あれだけ眠っている私を撫で回すくせに何を言ってるんですっ？」

「…なぜ起きていると言わなんだ。」

「そうしたら撫でてくれないに決まってるからです。」

「というか、撫で回す程でも無いと思うが。」

「…知っていますよ大谷さん、私の腹を撫でつつ『発展途上よな。』と呟いたことをー！」

「はて、なんのことかさっぱり。」

「胸と腹の違いが出てないってことですかー！そりゃ孫市姉さまのよ

うにはなつてませんけど!」

「み、巫女殿、落ち着け。」

「大谷さんが大きくしてくれないからってことですよね?」

「なぜそこで我の名が出やる。」

「だって胸って揉めb「やめよ巫女殿。」

「えへへ、あつたかいです。」

「全く…甘えたいなら最初から言いやれ。」

「最初から言つてたのに甘えさせるのを恥ずかしかつてたのはどっちですか?」

「…困つた巫女殿だ。」

「困つた大谷さんです。」

おこたの中のペア。(後書き)

大谷さんと鶴ちゃん。

結構好きです。

ほわほわした空気を出してくれれば良いなあ…

ラ・フランスの動物愛護。

官と吉

大谷さんが猫、かんべが犬。

「ご主人、飯はまだかね。」

「我がひっくり返してやったわ。」

「なんてこった。」

「ご主人、構ってくれんかね。」

「主様は今忙しい。」

「そいつは残念。」

「代わりに我が可愛がってやる。」

「お前さん、爪を構えて何をする気か。」

「ご主人、散歩に行こう。」

「主様は今居らぬ。」

「くう……。」

「我と行くか。」

「ご主人とが良いんだ。」

「ご主人、遊んでくれんかね。」

「主様は今パソコンに夢中よ。」

「あの絡繰を壊してしまおうか。」

「主様に嫌われるぞ。」

「ご主人、遊んでくれ。」

「聞き分けのない犬め。」

「この尻尾で誘惑してやるつ。」

「主様はパソコンの中のオジさんに誘惑されておるが。」

「なぜじゃー。」

「…。」

「なぜじゃー。」

「何を騒いでおる。」

「遠吠えだよ。仲間が気付いてくれるんだ。」

「気付くとどうなる。」

「来てくれる。」

「嘘を吐け。」

「元々、主様は猫派で、我のご主人よ。ぬしのご主人は主様の、と様である。」

「小生のご主人はご主人だよ。」

「なにゆえ。」

「犬嫌いなご主人だけど、小生を嫌っちゃいないから。」

「ぬしだけ特別扱いか。」

「お前さんもだろ。」

「…主様は動物アレルギーだったな。」

「ほらな。」

「お前さんは小さいな。」

「猫だからよ。」

「ご主人は小さいのが好きなのか？」

「ちっぴいも好きだと言っておった。」

「わふ。」

「丸くなって我の真似か。」

「ご主人に好かれるなら、それでも構わんさ。」

「暗め。」

「また小生の飯をひっくり返しただろう。」

「はて何のことが。」

「流星に怒ったぞ。」

「ひひひ。」

「…。」

「もっと何か言ってみせ。」

「…。」

「あ奴め、黙ったまま散歩に行きおつた。」

「…。」

「暗を怒らせてしまったようよ。」

「…ちとやり過ぎてしまったかもしれぬ。」

「…。」

「…一匹ひつで喋るのは、寂しい。」

「…。」

「のあん。」

「のあんのあん。」

「泣きながら鳴いてどうしたんだ。」

「ぬしが教えたのである、遠吠えよ。」

「仲間は来たか？」

「主様が帰って来てくれた。」

「そこは嘘でも小生が来てくれたと言っべきだろう。」

「死んでも嫌よ。」

「なぜじゃ。」

「ご主人は今日も絡繰とにらめっこか。」

「我は先ほどもふもふされた。」

「ずるいぞ。」

「ひひひ。」

「ご主人、早く小生に気付いとくれ。」

「へびしゅっ！ずび…ご飯だ、おいで。」

「わふ！」

「のあん。」

（またひっくり返す気だな）

（しかしこれではひっくり返せぬ）

（なるほど、皿と皿がくっついているな）

（落ち着いて食らいやれ、私の皿にドッグフードが入ってしまう）

（ぶいぶいぶい）

ラ・フランスの動物愛護。(後書き)

家では猫飼ってます。

元ネタは2chの何かのコピペだった気がしますが、記憶力の無さ
で思い出せません。orz

鳴き声ですが、にゃあ、って鳴く猫が身近に居ません。

のあん、とか、のわん、と鳴いてるのがいるので、参考にしました。

血染めのアプル。

三吉

千人斬りと称し、ここ最近、城下町の者が斬り殺されるという事件が相次いでいた。

とある町奉行が、そのことを太閤に知らせに来たらしい。

「病は千人を斬り、その血をねぶれば完治するとして、誰か病人の仕業ではないかという噂が…」

「それが吉継だと申すのか。」

「へえ、なんせ噂なものでして…」

ペコペコと頭を下げる町奉行と、静かながらも激怒する太閤。

怖や怖や…

我関せず、何もせねば、疑いも晴れよう？

床に戻ると告げ、早々に寝てしまう。

目が覚めたのは、丑三つ時。

体の上に、何か、否、誰かが覆いかぶさった。

「よく寝ているな。」

私の頬を撫で、薄く笑うのは、我が友、三成。

まどろむ意識の中、ひんやりとしたものが口に触れた。

そこに神経を集中させれば、三成が何かを塗っているらしかった。

(薬、か?)

不治の病に効く薬などあるまいと、と、薬にはあまり頼らなかったが、

それを知る三成だからこそ、こうして我が寝ている間にこっそりと塗って――

(!.....これ、は...まさか、)

塗りたくられていたモノから漂う香りは、戦場に居る時に感じるそれと同じ。

「まだ、百にも達していない…もう少し待ってくれ、刑部。」

我は、動けない。

これは、薬だと思っていたこれは、

（血、か。）

薄い唇に紅を指すように塗られた、人夫の、血。

「刑部、刑部…」

逃がすまい、として抱き込まれ、口を重ねられる。

ぬる、としたものが入り込み、口内までもが、香りで包まれる。

（死臭…）

愛おしそうに頬を撫でる男の手から、体から、匂う。

くらくらと、熱い舌に脳みそまでもが溶かされてゆく。

「ぎょつぶ。」

幼子が母を呼ぶのとは違う、そう、欲しいものを求める雄の音が、頭上で響いた。

(三成、三成…)

重い瞼を押し上げれば、銀の月が、狂気の色を含んで、我を見下ろしていた。

(ああ、われは…ぬしを拒めない)

血染めのアプル。(後書き)

この後、千人斬りはぱったりと止みます。

だって血なんてねぶった(舐めた)ところで治りませんもの。

パーシモンと雨と無知。

佐吉

佐吉は知っていました。

蝶が今まさに羽化しようとしていることを。

だから、手伝おうとただけなのです。

薄く柔らかい透明な羽を引っ張ると、

それはピリリと音を立てて佐吉の両手に残りました。

ポトリと地面に落ちた蝶。

どうして飛ばないのだろう、と佐吉は思いました。

せっかく、殻を取ってあげたのに。

佐吉は知らないのです。

それは殻ではなくて羽だということ。

「しょうがない、わたしがめんどろをみてやるっ！」

びくりびくり

返事をするように、蝶が、いいえ、

芋虫に戻ってしまったようなものが動きました。

「おまえのなは、ぎょうぶ。」

蝶は今も、籠の中で飼われているのです。

パーシモンと雨と無知。(後書き)

何が言いたいかと言うと子どもの無邪気って時々こあいつてこと
です、たぶん。

書いたのが深夜でしたんで、何書きたかったのか自分でもサツパリ
です。

あ、リクエスト受け付けてます！

なんてことないフリユイの末路。

私吉

作者が出ています。

季節のフルーツシリーズを書き終えて、一旦手を止めて大谷さんと対話した。

「ぬしはなぜ、こんな夢物語を書く？」

「…きっと私が幸せになりたいんでしょうよ。」

「我が皆に愛されると、ぬしは幸せになるのか。」

「はい。大谷さんは幸せになりませんでしたか？」

「慣れぬ事ばかりで戸惑いの方が大きいわ。」

「そりゃ失礼しました。…ふは、きっと、ここで書いた事も私の希望でしょうね。」

「ぬしが書いているのだから、当然である。」

「そうですね。だから、正直、こうしてお話したくはないんです。

私は私の願望を喋らせることしかできません。」

「なら何も申すなと？」

「まさか。存分に喋って下さいよ。」

「ぬしが書かねば、我は言葉を発せぬ。」

「そうでしたね、何を喋りたいんですか？」

「ぬしの思つがままを。」

「…意地悪ですね、流石です。脳内でボイス再生余裕でした。」

「戯れ言はもう良かる。」

「はい…では、感謝を。」

「…ここまで読むとは、なかなか我慢強き者よな。ヒヒ、気が向けばまた来やれ、

りくえすとは随時受け付けておるそうよ。」

「ありがとうございます。」

「竹。」

「なんです？」

「我らはぬしが書くようにしかならぬ。」

「ええ、そうですね。」

「…結果的に、ぬしが我を幸せにしてくれるのよな。」

「……………」

「画面の向こうにも、幸を降らせるか？」

「…らしくないですよ、大谷さん。」

「……………」

「不幸を降らせなくて良いんですか？」

「……………」

「どうして喋ってくれないんですか、私の想像でしょうっ？」

「……………」

「…そんなこと言わせたら、もう引けないんですよ？」

「……………」

大谷さんは、画面の中で不適な笑みを浮かべるばかりだった。

「…幸せにしてください、って意味ですよ、さっきの。」

「殺し文句でしたよ。」

「何か言っておきな。」

「大谷さん。」

彼自身の言葉が欲しいと、最近よく思います。

こんにちは、そっちはどうですか。

こっちはなんとかやっています。

液晶の壁を超えられない私は、今日も彼に言葉を喋らせて、自分を幸せにしています。

なんてことないフリユイの末路。(後書き)

1〜12月までのフルーツ書き終えたどー！

フルーツの解説は活動報告でします。

少しは楽しんでいただけたでしょうか？

私は至って大丈夫です、危なくないです。

そしてリクエストを下さいm(´`´)m

何が言いたいのかやっぱり分かりませんが、

今後も大谷さんを見守って欲しいです。

ばきばきカカオの日。

大谷さんとみんなでポツキーゲーム

伊達政宗×大谷吉継

「Are you ready?」

「6本も持つてどれを食べと…」

真田幸村×大谷吉継

「iiiiiiiiざ参る!!」

「参るも何もチョコがぬしの体温で溶けておるわ。」

石田三成×大谷吉継

「刑部とポツキーゲーム…」

「やれ三成、これは苺ポツキーだったか?何やら赤い。」

徳川家康×大谷吉継

「ずるいぞ刑部、自分から折ってしまうなんて。」

「…せねば我が食われてしまうのである。」

前田慶次×大谷吉継

「今キスしたら、きっとチョコの味だろうな、してみない。」
…
残念。」

長曾我部元親

「いただきます。」

「壁に押し付けるでないわ!」

毛利元就

「…3本では、なかなか折れないはずよ。」

「待ちやれ、ぬしまで阿呆にッ…む、ぐ…」

ばきばきカカオの日。(後書き)

落ちを毛利さまにお願いしてみました。

私は彼らをなんだと思っているのだろう。

あ、クロカン忘れた。

忘れんぼシユガー。

市と吉

お花畑に行きましよう？

そう言ったのは、いつだったかしら。

蝶々さんなのだから、お花は好きはずでしょう？

驚いた顔が、とても可愛らしかったわ。

下らぬな。

そう、言われてしまったのだけれど…やっぱり、蝶々さんは優しいのね。

「綺麗ね。」

「さようか。」

「蝶々さんは、そう思わない？」

千日紅、三波丁子、寒菊、山茶花…きれい、きれい。

いけないわ、市ったら、一人ではしゃいで。

慌てて蝶々さんの元へ戻るの。怒らないで、ごめんなさい、もう勝手なことはしないから。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。」

「第五天、何を謝っておるのか、我にはとんと分からぬな。」

「…怒ってないの?」

「何を怒れと。」

「市が、どこかへ行ってしまうこと、蝶々さんは怒らないの?」

***さまは、怒ったわ。

それが誰だったのかは、よく分からないけれど、きっと市が悪い子だからね。

「…また、戻って来るのである、ならばよし。」

蝶々さんはそう言って、竜胆を市に差し出すの。

「…市に？」

「ぬしと我以外、ここに誰が居ると言つものやう。」

「そうね、ふふ…そうね。」

市もお花をあげたかつたけれど、ちょうど降ってきた葉っぱが目にと止まったから、

それを蝶々さんの髪に飾るの。

きれい、きれい。

「銀杏、か。」

「桜もきつと似合つわ。」

闇色さんには内緒。だって怒られてしまうもの…

「蝶々さん。」

「うん？」

「…市、お花は好きよ。」

大好きなお花が、一つあった気がするの。でも、思い出せないの。

「ああ。立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿は百合の花：ぬし自身も花のようよ。」

「蝶々さんは、お花、好き？」

「さあて…どつてあるつなあ。」

蝶々さん、蝶々さん、お花（市）を嫌いにならないでね。ずっとここに居るわ。

「…帰るとしやるか。」

「はい、蝶々さん。」

蝶々さんは足が悪いから、輿に乗っているの。それを市が追いかける。

ちゃんと市の歩く速さに合わせてくれるのよ？蝶々さんは、優しいから。

「第五天。」

「なあに、蝶々さん。」

「…いや、なに……ぬしの歩く姿が、ほんに百合のようであったと
思っただけよ。」

「ふふ。」

蝶々さんは口が上手いのね。

一瞬だけ、ほんの一瞬、蝶々さんの声が震えたのは、秋の風に吹か
れて、寒かったからかしら……？

帰ったら、一緒にコタツに入りましょう？

ね、蝶々さん。

忘れんぼシユガー。(後書き)

忘れられるのは、悲しいですね。

長政さまは現在市ちゃんの記憶にありません。

そして花言葉の紹介です。

竜胆リンドウ：悲しむあなたを慰めたい、あなたの悲しみに寄りそう、正義、
悲しんでいるときのあなたが好き、淋しい愛情

銀杏イチョウ：長寿

闇属性はどうしてこんなに悲しくなるんでしょうか。

南部さん！ご閲覧のお客様の中に南部さん及びイタコ、降霊術を
習得している方はいらっしゃいませんか？

閲覧、ありがとうございます。

ソルトに悲劇。

光吉

現代転生によ谷さん。学バサ設定。
ソルトに悲劇。

困った。非常に。

現在我は、とても化粧の濃い女子らに取り囲まれている。

「調子に乗ってんじゃねえよ！」

体育館の裏なんて典型的で古典的な場所に呼び出され、

どうせだから思い切り笑ってやろうと出向いたが…失敗した。

どうせまた、三成か権現辺りのファンである。

だいたい、調子になぞ乗っておらぬわ。

こちらら前世よりの付き合いよ、今更男女の中になる訳無かる。

そう言ってやりたいが、前世なんて説明のしようもない。

小さく溜息を吐こうものなら、普段は整った顔立ちが鬼の形相に歪

む。

そして、体育館の壁に押し付けられるようにして、詰め寄られる。数は7人と言ったところか。

「石田くんに付きまとうのをやめろって言ってんのよ!」

「…。」

こういう時、わざわざ否定するともっとややこしくなる事を、我は知っている。

女子らには見えないよう、手を壁と背の間にやり、メールを打った。

こ奴らには悪いが、目当てが三成であるならば、今から幻滅されてしまえ。

送信ボタンを押し、やれやれと一息吐いたところで、腕を掴まれ、持ち上げられる。

「あ。」

「何せコイことしてんだよ!」

「早く移動しよ!」

うかつ。

先程のメールには、体育館裏としか入力していない。

気を抜きすぎたか、これは…髪の毛を全て薙られるくらいは覚悟せねばな。

クスクスという笑い声が頭上で響く中、埃くさい倉庫の床に、

我はまるで芋虫のように転がっていた。

腕は後ろで縛られ、口にはガムテープ。

前ほどではないが、やや動くのに不自由する足だけはなんとか縛られずに済んでいる。

「どつするっ、やっちやうっ？」

ケタケタと笑ながら私の髪を掴み、ぐい、と引っ張り上げる女子。

ああ、我に罵詈雑言を吐く口で三成に愛だの恋だのを囁こうと言っのか。

恐ろしいことよ。

髪を掴んで引っ張り上げられ、そちらを見ればフラッシュをたかれた。

「!?!」

「あー目え瞑ってんじゃん。」

眩む視界に、女子の一人の携帯電話が入ってくる。

まさか

「キャハハハ!!ほらあつ、脱げ!」

制服に手が掛かり、ぶちぶちと布が敗れる音がした。

…またしても、うかつ。

甘かった。最近の女子は、こうやって人を追い詰めていくのか。

上着のボタンは恐らくほぼ全て引き千切られ、Yシャツも無残な姿になった。

僅かにしかその存在を主張しない薄い胸と、それを覆う下着の白が

目に痛い。

「うっわ、貧相な体。」

「てか、マジ色黒くね？キモくね？」

「ええ〜！？石田くんてば貧乳が好きなの！？」

やいのやいのと、勝手な事を…

「あ、ねえ！男呼んじゃあ〜よ。」

戦慄。

私の思考回路は一時停止する。

…今、なんと？

分かっているはずなのに、その答えを出すことを脳が拒む。

ヒビ、我とて所詮は、女子ということか。ああ、こんなにも体が震える、ふるえる…

ついにはスカートにまで手が伸び、

ここだけまるで記者会見でも行われているかのような光の雨が、降

り注ぐ。

がらっ

突如、倉庫の扉が開かれた。

カツカツと倉庫内に響き渡る足音。

逆光に煌く銀髪。

そして、

「…随分と、楽しい事をしているじゃありませんか。」

笑顔を讃えながらも、地の底を這うような声。

「あけ、ち…？」

取れかかったガムテープの中で、声が行き場をなくしてくぐもる。

「大谷さん、先生を付けなさいと言っているでしょう？」

お世話にも爽やかとは言えない笑顔で、こちらに歩み寄っては白衣をふわりと我に掛ける。

「さて…君たち、何をしていたんです？」

にっこり

効果音をつけるなら、それ。

だが、当の女子らは半ば放心状態であんぐりと口を開けている。

我とて同じ気分よ。なぜ明智が…

しどろもどろになる女子らを眺め、明智は再び口を開いた。

「1組、××さん、×？さん。2組、——」

どつやらそれは、ここに居る女子全員の名前らしく、呼ばれた生徒は顔面蒼白、

もはやどちらが悪人だか分からぬわ。

「…覚悟して、下さいね。」

白衣に身を包んだ我を横抱きにし、そう言っ

倉庫から出る明智の面は、悪人そのものであったように思う。

処変わって、保健室、通称：明智の住処。

「いやあ、それにしても良い格好ですねえ？」

舐め回すような視線を寄越すので、急いで白衣に腕を通す。

ぼす、という気の抜けた音と共にベッドに降ろされ、ようやく一息吐いた。

「見ても面白いものでは無かる、ジャージを持って来ては…くれぬよな。」

「良いじゃありませんか、白衣似合ってますよ。」

ベッドの端に腰を掛け、明智は尚もニヤニヤと薄気味悪い笑顔を浮かべる。

その顔に数珠でもぶち込んでやりたいが、助けられた事に変わりはない。

だが…

「…なぜ、ぬしが来た。」

「貴女がメールしたからですよ、当然でしょう?」

我は三成にメールしたと思っていたが。

送信履歴を見れば、確かに送り先は明智になっていた。

明智

浅井

石田

…なるほど、並ぶ順序を見れば間違えるのも無理はない。

「ふふふ…まあ、石田くんには、そんな姿見せられないでしょう?」

「確かに、な。」

借りを作ってしまったということだけが、思考を支配する。

「お弁当。」

「うん？」

「手作り弁当で手を打ちましょう。」

目の前のこ奴は…何を言っている？

突然過ぎて頭が追いつかない。

今日は厄日か、そうか。

「明日、楽しみにしていますよ。」

先程見せた凍り付くような笑みでも、薄ら笑いでもなく、

余裕を持った、笑顔。

残念なイケメンとはぬしのことよな、きつと。そうして笑っていれ
ば、まだ見れる。

…いやいや、そうでなく。

弁当？なにゆえ。

「それで貸し借り無しにしてあげます。」

再び笑った明智は、やはり悪人面だった。

ざわざわ

心臓の辺りが、そう騒ぐのは、気のせいであると思いたい。

気付けば頷いていたけれど、

（全然、格好良くなぞないわ。）

ソルトに悲劇。
(後書き)

続く…かも？

草食系ヒネガ！。

三 吉

学バサ設定。

「刑部。」

どこか遠くから、我を呼ぶ声が聞こえた。

「刑部。」

ああ、また。

「起きろ、いつまで寝ているつもりだ。」

枕にしていた腕を引っ張りあげられ顔をあげる。

呆れ顔の三成が見下ろしていた。

「…あいすまぬ。うとうとしていた。」

「そうか。帰るぞ。」

腕を離され、机の横に掛けて置いた鞆を手に取る。

しとしと

外は雨が降っていた。

ツイていない。今日に限って天気予報を見忘れるなんて。

「傘を忘れたのか。」

「ああ、先に帰りやれ。我は雨が止んでから帰ろつ。」

「それだと遅くなる。そこの駅まで歩いて今日は電車で帰るぞ。」

特に考えるでもなく、頷いて座布団から降りる。

それを鞆に詰めて、三成の傘に入った。

しとしと

駅に向かうにつれて、雨足は強くなったように思えた。

（残らなくて正解であったか。）

「刑部、水溜りだ。」

「あい。」

支えられ、更にそんな言葉を掛けられる。

…雨の日くらい頼るのは、仕方のないことよ。

そう自分に言い聞かせて水溜りを避けた。

ぶるるる

車一台がようやく通れる道を、バスが通った。

泥水を跳ねさせながら。

道路側に居た三成に、それが少し掛かる。

我はポケットからハンカチを取り出して制服を拭いてやった。

ぶるるるる

今度は、車だった。

急いでいるのか、水飛沫を上げながら向かってくる。

逃げ場は、電柱の影。

民家の壁と、三成に挟まれる。

私の視界は三成で覆われた。

傘に入った時よりも距離が近くて、手を伸ばせば触れられる程。

そして、二人分の白い息が、空気に溶けて見えなくなった。

しとしと

車は去った。

それに合わせて、三成も退く。

傘に入り直してまた歩き出す。

距離は、もしかしたら少し遠くなったかもしれない。

同じ傘に入っておきながら、なぜそう思うのか、気付いてはいけな
いような気がした。

近くて遠い。

そうこうしているうちに、駅に着いた。

「空いているな。」

「そのようよ。」

電車の中に人はまばらにしか居らず、その誰もが椅子に座って居た。

ぽっぽっ

雨が窓を叩く音が不規則に鳴った。

とん

肩に何かが乗って来て、横を向けば三成が我に凭れて眠っていた。
驚きのあまり、声が出ない。

(三成が、寝ている…?)

まともに食う寝る休むをしない、この男が、寝ている。

すうすうと寝息が頬に掛かり、くすぐりたい。

ふわりと、三成の香りが鼻を掠めると同時に、先程引っ込んだはずの睡魔が我を襲う。

(ならぬ、今我まで寝ては――)

意識は、どろりとした沼に引きずり込まれて行った。

び、ちゃん

首筋に冷たい物が落ちて来て、もぞりと体を動かした。

焦点の定まらない目で前を見やれば、銀色が揺れている。

「…。」

そこは、もう電車の中ではなく、いつもの帰り道だった。

恐らく我より先に起きたのだろう。

起こせば良いのに、三成は我を負ぶって歩いている。

(降ろしやれ)

その一言が出てこないのは、寝起きで声が上手く出せないせい。

(ありがとう)

礼の一つも言えないのは、言い慣れていないせい。

言い訳を並べて、また目を閉じた。

心音が速まっていることに、我も三成も気付いている。

我が起きてること、知っているのである。

それなのに、どちらも何も言わぬのは、

(何のせいにするかは良いのか)

ソイに蜘蛛の糸。

親吉

ここ最近、寝不足でよくうとうとしていると思っ。

なぜか。

原因は分かっているのに、それをどうにかする術を知らない。

頬に当てられた手、撫でられた頭、掴んだ腕…

夢にそれらが出て来るせいで、安眠もできない。

ぼんやりと、また目を閉じる。

「大谷。」

「…ん…」

呟かれるのは、甘く柔らかい響き。

「大谷…」

ぬしのせいで、眠れない。

曖昧な声色。嫌われては居ないと思う。

しかし、本当に特別好かれているかと聞かれば、そうだと即答もできない。

「ほら、起きろ。」

手を伸ばされる。

そう、このせいで、先一步が踏み出せない。

絶対に自分から触れようとはしない。

手を、伸ばすだけ…

こちらから求めなければ、それ以上を望まないとも言いたげに、

紳士ぶって、素知らぬ顔をして、引きずり込もうとする。

まるで、蜘蛛が巣を張って獲物を待ち構えるよう。

触れれば千切れてしまうような糸の中に、どうしたって千切れない糸を忍ばせて、

がんじがらめにされていく。

それが分かっていたとしても、蝶はまだ逃げられずに、その腕に手を伸ばすしかないのだ。

くるすワードミン。

慶吉伊

学バサ設定。

明智が出張でない保健室。

それだけでそこは地獄から天国へと姿を変えた。

サボりに来る生徒が後を立たないため、見張りとして一人の生徒に白羽の矢が立った。

大谷吉継

その外見もさることながら、口から吐くのは恐ろしい病名と来れば、生徒たちはまず近寄れない。

誰だって自分の余命など聞きたくもないし、やけに説得力があるせいか、

そんな気がしてしまうのだ。

ただの暗示。

だが、それを信じ込ませる術に掛けてはザビーにも劣らないだろう。
そんな彼のいる保健室に、今日も来客がある。

「ヒ、ヒ…これはまた、派手にやったものよ。」

人の怪我を見てニヤニヤと嬉しそうな顔をするコイツ。

本当に根性ねじ曲がってんなって思う。

「Shut up! ちょっと打っただけだ。」

「ほう、ちよつと、か?」

頬の辺りに手をやって、少し強めに撫でられる。

いや、撫でるなんて優しいもんじゃなくて、抓るって方が正しい。

「いつ…——つてえええ!!」

「…にしても、サッカーボールを顔に受けるとはなあ。」

笑ながら目を細めて、まだ俺の顔をペタペタ触りやがる。

「痛ッ！！…サッカー部があんなところで活動してるからな。」

そう、俺は幸村の蹴ったボールを顔面でキャッチした。

それを聞けば、またコイツは「ヒ、ヒ」と楽しげに笑う。

（人に降りかかる不幸がそんなに嬉しいか、人として終わってんだろ）

そう思うのに、だ。

その笑顔を可愛いとか思ってる俺の方が終わってる。

今だって、顔に手が触れてて、もっと触って欲しいだとか、俺も触りたいだとか…

そんな事ばかり考えてる。

顔が赤いのは、サッカーボールが当たった、それだけのせいじゃない。

「男前が台無しよなあ。」

「っ…！」

息を、飲む。

分かってる。(ただの世辞だ)

それなのに、熱が、心音の速度が、上がる。

「今はイケメンと言ったのであったか？」

「…らしいな。ま、キヤーキヤー騒がれんのは好きじゃねえ。」

「贅沢者め。」

「アンタは、そう言っつゝの無えのか。」

「…と、言っつゝ？」

「女と付き合ったりだとか。」

キョトンと間の抜けた顔をして、すぐに肩を震わせ俯く。

そして、いつもの引きつり笑い。

「ヒ、ヒ…！ぬし、頭まで打ったか？ひゃひっ…！く、笑わせ、ふ、

ふ…！」

「笑い過ぎだろ…」

腹を押さえてバンバンと俺の肩を叩く。いてーんだよ、オイ。

「この容姿なのでなあ、言い寄ってくる女子など居らぬわ。」

「そう言つもんか？」

じゃあその容姿ごと好きになった俺はどうしてくれんだ。

「あー…じゃ、もし付き合つたらどんな女が良いんだよ？」

「もしも話か…ふむ。」

特に考えた様子もない。が、こつちにはかなり重要な話だ。

ま、男同士だとかそういうのは後で考えりゃ良いだろ、うん。

「…我を、好いてくれる者が良い。」

「は？」

「我に好きだと言ってしまえる奇特な者が良いと言ったのよ。」

そんなの、今すぐにだって俺が――

「なら、俺が」

ガタリと椅子から立ち上がり、大谷の両肩を掴んだ。

その奥でふわりと動いたカーテンと、人の影。

「ま、えだ……」

「よっ！独眼竜。」

「よっやく起きたか。」

三者三様にそれぞれに言葉を掛けて、俺は気まずくになって大谷の肩から手を離れた。

「…何か言い掛けていたか？」

「お、俺が探してやる！」

「はっ？」

「俺がお前の事好きな奴探してやるってんだよー!!」

ああもう、めっちゃくちゃだ。

普段人の恋を応援しまくってるくせに、どうしてこつこついう時だけ邪魔すんだ、前田の野郎オ…

訳わかんねえ事言って、部活に戻ると伝えて足早に保健室を出る。

「だあー!! Shitツ!!」

前途多難。

大谷のこと好きな奴なんて、いっそ、

(お前の目の前に居るぜ、とか)

いつか絶対言ってる。

「…妙な奴よ。」

「ははっ！アイツも熱血だからなあ、意外と本気で探してくれるか

もしれないぞ。」

吉継の後ろに立って、肩に顎と両腕を乗せてダラリと脱力する。

「重い。」

悪いな、独眼竜。

お前の恋、今だけは応援してやれねえんだ。

きつとコイツは、本当に好きって言うてくれる奴を好きになるだろ
うから、

俺は狡いから、

ごめんな。

「好きだ。」

くるすワードミニ。(後書き)

強かKGは好きですか。

出番は抑えまくっています、だってKGだもの

その割に、出しゃばってる感があるのは気のせいでしょうか。

閲覧ありがとうございます。

使いかけシーズニング置き場

私吉

作者が出ています。

季節の果物のお次は調味料の「さしすせそ」

ミソの使い処が可笑しいのは目を瞑って頂こう、そう思って手を止める。

「…二度目まして、大谷さん。」

「ヒヒ…もう気付かれたか。」

いつの間にか携帯の画面に映り込んでいた影に、盛大に頬の筋肉を緩ませる。

「…今日も其処ですか。」

「ああ。我は画面からは出て来られぬようよ…ぬしの前ではな。」

「…私の？他の人の前には出ていると!?!?」

そんなファンタジーな世界、聞いてない。何が、私の何が駄目だと言っただ。

あれか、襲いそうだからか。

「…普通、こついう処では、ぬしが此方へ来るものではないのか？」

「確かに、其方へお邪魔したいですが…私がそちらへ入ったところで、

物語りは展開しないんですよ、大谷さん。」

モブとしての役割ならこなせるかもしれないが、

メインとして動けるかと問われれば、否、としか言いようがない。

二次元に入りたいのは山々だ。しかし、入れるとすれば、それはやはり私でないと思うのであって。

「…ぬし」

「止めて下さい、夢見ていたんです。」

「……こちらへ来られないというのは」

「大谷さん。」

臆病者は、自分の想像にすら、負けてしまうのです。

都合の良いように解釈しようとしても、限度があるのです。

妄想だって、自分を出してしまうと壊れてしまうのです。

「大谷さん、やっぱり私、外からの方が楽しいです。」

「さようか。」

貴方の目には、私を入れたくないのです。

汚い、穢れ、邪な心を見透かされそうで、怖いのです。

「ト、ト…」

「何が可笑しいんです?」

「自分の創り出した者に、そんな事を思っぬしはどっかしている。」

知らないフリをして下さいよ、意地悪ですね。

「百も承知よ。」

また来てくれますか。

「ぬしが望めば、な。」

待ってますね。

「たまには茶くらい出してもバチは当てぬぞ?」

大谷さんに当てられるなら本望です。

「よし、数珠を当ててやる。」

「こちらに来られもしくせに。」

ポツリと出てしまった本音。

当てられるなら、いつそ当ててみやがねってんです。

大谷さんは、それ以上何も喋りません。私の想像が途切れたせいでしょう。

「我を見くびるなよ…?」

ツンと鼻を刺すような香りが漂ったのは、気のせいでしょうか。

使いかけシーズニング置き場。(後書き)

ええ、気のせいでしょうね

私は至って普通の人です、怪しくありません。

通報とか警察とかお巡りさんとかワンさんとか止めて下さいお願いします。

そしてリクエスト受け付けてます！

ミルクィから招待状。

官吉

現代転生（記憶無し）によた谷さん。

「いい加減にしやれ。」

助手席に乗るコイツは非常に不愉快そうにそう言った。

黒い短髪に褐色肌、服で見えないが所々に巻かれた包帯。

一見すればおめかしのつもりだろうか、

白とクリームを基調とした生地には赤い蝶の刺繍がされた、ふんわりと柔らかそうなカーディガン。

その下には深緑のワンピース。こちらには、まるで蜘蛛の糸のような白い刺繍が目立つ。

首から掛けた懐中時計は胸の辺りでチクタクと時を刻んでいた。

対する自分は、特にめかし込んだ訳でも無く、

いつも通り古びたジーンパンにカーキ色のジャケット、インナーはそれに合わせて黄色がかっている。

加えて無精髭と長く垂れ下がった前髪、こつ言ってしまったえばなんだが、

とても釣り合っているとは思えない。

「すまんね、こついう事は初めてなんだ。」

「…なんと?」

キョトンとした表情を浮かべるソイツに、どうしたって逆らえそうにない。

相手は中学生だと言うのに、とつくに成人済みの小生が気圧されている。

「女を車に乗せた事がないって言ってるんだ。」

それを聞けば、もう顔を覗かなくなっただってどうなっているか分かる。

唇を噛み締めてぶるぶると震え、笑いを堪えているんだろう?

ああ、思った通り、コイツは身をよじって笑い出した。

だが、それもすぐに止まってしまふ。…マズイ、な。これは。

笑い飛ばしてくれたのなら、まだ良かったのだが、コイツは怒るべ

き点に気付いてしまった。

「…で、予定は未定と言う訳か？」

返す言葉もない。普段、知性派知性派と言って回っている割に、こ
ういった事を計画し、

更に実行した事などなかったものだから、つい俯きがちになる。

「普通、どこに行くとか考えるものではないのか？」

「あー…」

「我に決めろとも言つのか？」

やれやれ、と盛大に溜息を吐き、じとりとこちらを睨まれる。

なんてこった。少しくらい、考えて来たって本当は良かったんだ。

小生だって、こんなつもりじゃなかった。

煮え切らない様子の小生を見て、コイツは何か思いついたようにニ
イと口角を持ち上げる。

「のう。」

どこか大人びて、妖艶ささえ伺える声色に、びくりと体を震わせる。なんて声で人を呼びやがるんだ、小娘のくせにっ…！
けれども、とつくに「なんだ」と返事はしてしまっていた。

「…っついつとき、することがあるである？」

身を乗り出して笑いかける。含み笑いだ。

その笑顔を見て、ごくり、と生唾を飲み込んだ。

分かっている、分かっているのだが…

それをしてしまえば、本当に取り返しが付かない事になることも、分かっていた。

気付いているくせに、素知らぬ顔をして首を傾げる。

「なんだ？」

「我に言わせる気が…？」

次のコイツの言葉だって、簡単に想像できる。

ああ、そうだよ、小生は臆病者だ。なんどでも言いやがれ。

「身代金よ。」

小さな鞆の中から携帯電話を取りだして、笑顔を貼り付けたまま小生に渡す。

「まずは私の身代金を用意して貰わねばなあ？」

期待感いっぱいに囁かれた言葉。携帯には、あの石田財閥の家紋「大一大万大吉」がある。

震える指先で電話番号を押しながら、

馬鹿なことをしてしまったついで先程までの小生自身を恨んだ。

(一) 〇〇〇〇

ミルクィから招待状。(後書き)

かんべさんリアル手錠コース行ってらっしゃい！

ついでいんぐカメラ。

家吉 三

それは、嫁ぐ前に見た、白昼夢。

白無垢にその身を包み、角隠して表情は読み取らせない。

それはどこからどう見ても花嫁衣装であつたが、

中身の自分は手弱女には程遠い男だつた。

なぜそんなものを着ているのかと言えば、

これから婚礼の儀が行われるから、らしい。

らしい、と言つのは自分は化粧だけして待機せよと言われたため、

それ以上のことを知り得ないからだ。

関ヶ原を回避するため、輿入れする事に落ち着き、

ならば刑部が良いと阿呆を抜かされ、今現在こうなっている。

そこへ、す、と襖が開けられ、正装をした友が姿を見せた。

「刑部、支度は済んだか。」

「もちろんよ、三成。」

軽く白粉を乗せ、まぶたから目尻にかけて薄桃色の化粧。

ただ唇の紅は真紅で、そこだけ浮いているような気がした。

どうやらそれは三成の目にも留まったらしく、眉を僅かに顰める。

「刑部、貴様ならもう少し薄い色の方が良い。」

無言で紅に指をやるうとすれば、手を掴まれ、引き寄せられる。

浮かない顔が間近に迫り、息を飲んだ。

「遅いぞ、二人とも！主役が揃わなくてハラハラしていたんだからな！」

三成の手に引かれた我を見つけた家康が不安げな声色でそう言った。
何も今更逃げも隠れもできるわけ無いと言うのに。

そして、婚礼の儀が手配通りに進められて行く。

ふと顔を上げたそこには、友の姿があり、

自分と同じ口元の紅が白い肌によく映えていた。

(これで、ちょうどよくなった)

(さらってはくれぬのよな)

(それをのぞむか)

(……………いな)

リクエスト1 (前書き)

フランキーさんからのリクエスト

Pandora Hearts

より、

ブレイクxレイム

リクエスト1

「っの、バカ!!」

振りかぶった手を机に叩きつければ、ハラハラと数枚の書類が落ちた。

どれもこれも全て、ブレイクの仕事だ。

あいつ、目が見えなくなったのを良いことに

今まで溜め込んできたのも押し付けているんじゃないか…？

ふと脳裏を過った考えは、恐らく間違っではないだろう。

なぜなら、今ちょうど拾い上げた書類には、半年以上前の日付があったから。

「~~~~ツツ!?バカか!!」

「さっきから、そればかりですネ。」

棒付きキャンディを口に含んだザクスが、机の下から這い出てきた。

「ヨイシヨ、っと。」

「…まさか、ずっとそこに居たのか？」

「マサカ。君が諦めて出て行くのを待って居たんです。」

ふう、やれやれ、と肩を竦めてみせるザークシーズ。

だが、ここは私の部屋だ。

「…邪魔でもしに来たのか。」

眉を顰めると、盛大に溜息を吐くザークシーズが目に入った。

「バカは君の方ですネ。」

思い切り鼻で笑われ、文句の一つや二つやいっそ十くらい言っ
てやろつと近寄ると

ふわりと甘い匂いがした。

けれど、それは、今さっきブレイクが舐めていた棒付きキャンデー
とは違う香だった。

「…カップケーキ？」

「よく、分かりましたネ。」

パチクリ、と目を瞬かせるブレイクは、バツが悪そうに紙袋を背中の方に隠す。

「…休憩しよう。」

「ハイ？」

「お茶にすると言ったんだ。」

(どうせそのつもりで来たんだろう?)

日も落ちて、どう考えたってティータイムには間に合っていないけれど、

私たちは書類を放り出してテラスに出た。

「良い香りですヨ。」

私の淹れた紅茶を緩んだ表情のザークシースが見つめる。

「カップケーキは？」

「もう食べちゃいました。」

「嘘だな。」

「…美味しくありませんヨ。」

「食べてから決めれば良いことだろう。」

妙だ。

お気に入りのお菓子を持ってくる奴ではないし、

そもそもここで出るお菓子に不味いものはないはず。

「…手作り…いや、まさか。」

流石に無いだろうと首を振りつつザークシーズを見れば、目を逸らされる。

「…え。」

「食べたきゃ食べれば良いデシヨウー!!」

カップケーキの一つを思いっきり口に突っ込まれ、むせ返る。

「ぐぶあっ、ん、ぶ…ぞくぶ、…！」

中に入っていた生クリームが舌の上でとろけ、喉の奥に滑り落ちる。

ごくっ…ん

私は口を、ザークシーズは手をクリームまみれにして、騒がしいお茶会が始まった。

「…美味しい。」

「お世辞は結構です。」

「人がせっかく褒めてるのに…！」

「褒めて欲しいなんて言いましたっけ？」

ふん、とそっぽを向くザークシーズ。その手にはカップが包まれていて、

傷付いた指先を温めているようだった。

切り傷か何か、更に軽めの火傷と打撲。

カップケーキを作るのに払った犠牲は、どうやら少なくないらしい。

分かり辛いけれど、恐らくは私を休ませに来てくれたんだろう、

そう思うとなんだか笑えて来た。

だって、あの、ザークシーズが手作りカップケーキを持って私の部屋に来るなんて。

「どうしたんデス？ニヤニヤして。」

「なっ、ニヤニヤなんてしていない！それより、クリームが付いているぞ。」

ひょい、とザークシーズの口元のクリームを指で掬い取る。

「あー、だめデス。」

私の手を取り、ザークシーズはそう言った。

ぱくっ

何が、と口を開く頃には、私の指はクリームごと奴の口の中。

「な、…」

頭が追いつかない。

(ザクスが私の指を、舐、め…てる?)

ざり、とした舌の感触に、ようやく我に返る。

「…ザークシーズ貴様ツ!!」

腕を思い切り引いているのに、全く動かない。

指から伝わるザークシーズの舌は、やけに熱っぽかったような気がする。

クリームを舐め終えたザークシーズが、ようやく口から私の指を解放した。

ちゆ

と、指先にキスをして、

「ご馳走さま。」

「ば、バカザクス!!」

「俺は何も見ていない、俺は何も見ていない、俺は――」

「やあ、ギルくん。…何を、見たんデス？」

茶会も過ぎた真夜中、ギルバートの悲鳴が響き渡ったという。

(オズを探してただけなのに!)

リクエスト1（後書き）

このように、リクエストして貰えば、大体書きます。

して下さいな。m (_ _) m

リクエスト2（前書き）

フランキーさんからのリクエスト
君と僕。

より、

祐希と要

リクエスト2

やっぱり、慣れない。

香水、化粧、制汗スプレー？

もう、吐きそう。

「悠太、むり…。」

「分かった、行っといで。」

ゆるく頭を撫でられてから、悠太の肩から頭をどけ、反対方向に歩き出す。

向かうは、屋上。

「なんで居るの。」

「お前こそ。」

開け放った扉の向こうは、自分を歓迎していなかった。

給水塔の上、お気に入りの場所にはメガネが居る。

「酔った。」

「へえ。」

「要センセ、サボリ？」

「誰が先生だ、誰が。」

要の横に真後ろに座って、椅子代わりに寄り掛かってやった。

「…おい。」

「サボってたって、言わないから。」

これくらい良いでしょ、と思いきり体重を掛けてやった。

ぐえ、なんて潰れたカエルみたいな声が聞こえたけど、気にしてあげない。

すう、と息を吸い込んで、空を仰ぐ。

「…寝んなよ。」

そよぐ風が、前髪をなぞった。

ガチャ

「！」

「！」

誰かが、屋上にやって来たらしい。

（誰だろ…）

こっそり覗けば、春と千鶴だった。

声を掛けようとした要を止める。

（なんだ？）

（サボってるの、バレるよ）

ジェスチャーで会話をし、仕方なく二人を見守る。

「…あーのさっ、春ちゃん、ゆうたんのこと好き？」

「ふえっ！？え、え、そ、それは好きだけど…」

「じゃあゆっきーは？」

「す、好きだよ！」

「なんだありゃ。」

「良かったね、要のことも好きだった。」

二人のやり取りは、あと何回か続いて、よじやく

「じゃあ、メリーは？」

その質問に至った。

(遅過ぎでしょ)

「膝、貸して。」

春が何かを言う前に、要の腰辺りを捕らえてそのままうつ伏せになる。

仰向けだと眩しいから。

「は？おい、なんで「静かに。」

お腹を枕にしてるから、脚が少し邪魔だった。

「…お休み。」

文句なんて聞こえません。

千鶴には悪いけど、まだ今は進展して欲しくない。

このままが好きだから、もう少しだけ、知らないフリをさせて。

俺以外は気付かなくて良い。

特に要は。

くつつけようとしそうだから。

だから、さっきの二人のことは、世間話で済ませておいて。いつの間にか、春と千鶴は屋上からいなくなっていた。

「…ったく。」

一定のリズムで上下する肩。

毎日顔を合わせていても、寝顔はそれなりに貴重だ。

整った顔立ち。

長いまつ毛が、風に揺れる。

「気付いてねーのは、お前もだろ。」

自分の事に関しては、無関心なこのバカは、人の気も知らないでグーッスカ寝やがって。

(あ、髪、柔らけ)

給水塔に寄り掛かって、気付いたのはお昼のちよつと前。

ポケットで振動するケータイを取り上げると、メールが届いていた。

差出人：浅羽 悠太

（件名なし）

20xx年11月7日12:40

あげないよ。

「上等。」

ケータイをしまって、祐希を起こす。

(おっちゃんおっちゃん)

(おっちゃんおっちゃん、おっちゃんおっちゃん、おっちゃんおっちゃん)

(...おっちゃんおっちゃん)

リクエスト2（後書き）

お兄ちゃんの方が隠れ超ブヲコンだと美味しいんです、はい。

リクエスト3 (前書き)

朱雀卍さんからのリクエスト

戦国BASARA

より、

元親×政宗

リクエスト3

「怖えなら、目え瞑ってる。」

「…っ、う」

「…んなに怖え？」

「てめっ…！」

「あ、ズレた。お前がシテ欲しい場所はそこじゃねえだろ。」

「や、あ…も、いい…」

「へーきだつて、俺上手いだろ？」

「…っるせ…下手くそ。」

「泣きそうな顔して強がんなよ。」

「…お前、楽しんでるだろ。」

「おっ。」

「ピアスの穴開けんのに何十分掛ける気だ、バカ。」

「イクぞ。」

「い、ちいち、言っんじゃね、え…ひっ！あ、あ…！…！」

「ちょっと血ィ出たわ、ワリ。」

「てい、ティツシユ！」

「ん？舐めときゃ良いだろ。」

「だ、だからって本当に舐めんじゃねえ！…！」

「よっし、キレイにできた。」

「もうテメエには頼まねえからな。」

「なんでだよ、キレイにやっただろ？」

「うるせえ…！」

リクエスト3（後書き）

なんぞこれ

書いといてなんだが、

バカは私です。

リクエスト4（前書き）

フランキーさんからのリクエスト
オリジナル設定を頂きました。

鮎川×柳

リクエスト4

上司と部下。そして、男同士。

付き合うとか、可笑しいんだ。こんなの。

「おっはよー、やーなぎちゃん。」

へラへラ笑いながら、いつも遅刻すれすれに会社してくるこの人は、

「おはようございます、鮎川部長。さっさと仕事して下さい。」

僕の恋人、らしい。

「きつびしー！そんな真面目なところも好きだけどー。」

「寝言は寝て言って下さい、そんなことより、仕事です、仕事。」

「仕事と俺、どっちが大事なのさっ!」

よよよ、と口で言いながらしなり、とお姉座りする。ちなみに、

僕の机だ。

「はあ…仕事してくれる人が大事です。」

「任せて!」

お世辞にも、可愛い台詞なんて吐けない僕。

それでも鮎川さんは、なんとなく分かってくれてるらしい。

ふんふんと鼻歌なんか歌いながら、物凄い速さでキーボードを押していく。

…さすが、部長と言っただけありますね。

「あ、柳くん、専務が呼んでたよ。」

「…。」

「柳くん?」

「…え、あっはい!」

「はは、専務が呼んでたつての言いに来ただけだね。」

「すみません、すぐ向かいます。磯貝さん。」

見とれてた、かもしれない。

仕事ぶりに、そう、あくまで仕事ぶりに見とれていたんだ！

悔しくて鮎川さんの居るデスクを見ると、ニヤニヤ笑いながら投げキッスを送られた。

くそっ、いつか見返してやる…

今は、それよりも呼び出しを受けないと。

…専務が、何の用事なんだろう。

「柳です、失礼します。」

「ああ、来てくれたか…」

誰も居ない倉庫に呼び出されるなんて、僕は何かしてしまったのだろうか。

「そう固くならないで、今日はちょっとお願いをしたくてね。」

「お願い、ですか…？」

白髪交じりなのに、どこか若く見える専務は、目を細めて笑った。

「君は、あー…鮎川くと仲が良かったよね？」

「い、いえ！そんなことは…」

周りから、そんな風に見られているんだろうか？

僕は一気に緊張した。まさか、まさか…バレているなんて、もしそうだとしたら…

「良いんだよ、上司と部下の仲が良いということは、とても好ましいことだ。」

「あ、ありがとうございます。」

良かった。そういうことでの呼び出しではないようだ。

ホ、と安堵の溜息を漏らす。けれど、その吐き出された溜息を、僕はすぐに飲み込む事になる。

「で、頼み事なんだけどね、私の娘と鮎川くん、ちょっとお見合い

でもしてくれないかなあ、と思ってね。」

「…へ？」

お見合い？誰が？鮎川さん？なんで、僕が居るのに、

「何回かそういう話はしたんだけどねえ、彼、ノってくれなくてさあ。君からも一言、言ってくると有り難いんだけど…どう？」

「…。」

鮎川さんが、お見合い…ゆくゆくは、結婚、とか。

ぐるぐると頭に浮かぶのは、綺麗な家の庭なんかで、子供たちと楽しげに遊ぶ鮎川さん。

その横には、顔の見えない女の人。

「柳くん？」

「は、い…言ってみます。」

「そう、それは良かった。それじゃ、もう戻って良いよ。」

半ば放心状態で職場に戻る。来る前と同じ景色なのに、どこか灰色

ががっているように見えた。

(お見合いのこと、鮎川さんに言わなくちゃ…)

言いたくない、言いたくない、けど…鮎川さんは、そうした方が、
幸せなのかな。

「柳くん、顔色悪いけど…大丈夫？」

「…黒川さん…」

誰かに話しを聞いて貰いたかったけれど…そんなことしたら、困る
のは僕たちだ。

「なんでもないんです。すみません…」

(こんな時、鮎川さんなら)

どうしたら良いのか分からない時、いつも浮かんで来るのは鮎川さ
んだ。

僕は、情けない。

女々しくて、こんな風になりたかった訳じゃないのに。

「…鮎川さん…」

「呼んだ？」

思わず名前を口にしたら、どこから沸いて出たのか、鮎川さんが目の前にいた。

ただし、まるでオマケみたいにくっついた女性社員と一緒に。

「鮎ちゃん先輩、きっと邪魔になっちゃってるんですよ。」

「ええっ！？本当かい。鈴ちゃん！」

「ほら、あっち行きましょ。」

（やめろ、触るな）

僕の、鮎川さんに…触らないで。

腕を引く鈴という名の女性社員も、されるがままの鮎川さんも見てられなくて、

挨拶もなしにそのまま早足で通り抜けた。

(嫌だ) (嫌だ) (嫌) (いや) (鮎川さん)

汚い、感情。気持ちが悪い。僕ばかり、好き、みたいで。耐えられそうに、無い。

地下の、印刷用のコピー用紙が置いてある個室に、転がり込むようにして入る。

いつの間にか、全速力で走っていた。

じっとりと汗ばんだ手を見つめて、握りしめる。

(怖い)

怖い、鮎川さんが、僕の元から去ることが。

鮎川さんが、結婚する時、僕はきつと、掛ける言葉どころか、会わせる顔すら、無いだろう。

「…鮎川、さん…」

返事は、帰って来ない。

振り切って来たのだから、当然だろう。後ろを振り返っても、鮎川

さんは居なかった。

居ない、居るはずがない、居たって困る。

こんな顔、見せられない。僕は、声を押し殺して膝を抱えた。

(鮎川さん、鮎川さん)

「呼んだ？」

頭上で声がして、反射で顔を上げれば、息を切らした鮎川さんが、居た。

「…な、んで、」

「呼んだデシヨ？あー…疲れた。」

無遠慮にどさ、と僕の横に座って、息を吐く。

「呼び出しの後から、様子がおかしいけど…なんかあった？」

「…専務の娘さん、と…お見合い、しないんですか？」

睨むように横を見れば、鳩が豆鉄砲食ったような顔をしていた。

「…柳ちゃんは、さ…俺がお見合いしても良いの？」

(して欲しくない)

そう思っているのに、どうして僕の口は、本当のことだけ言えないんだらう。

「勝手にすれば良いじゃないですか。」

「あ、っそ。」

突き放すような言い方で、その声は、とても冷たくて。

僕にだけ好きと言ってくれた鮎川さんが、どこかへ行ってしまいうような気がして、

気がつけば、僕の手は鮎川さんの手の上に重ねられていた。

「…柳ちゃん。」

「したいなら、すれば良いじゃないですか。」

きっと僕の手は震えている。声も。

「本当に？」

鮎川さんの指が、僕の指に絡む。

「…ッ」

ぎゅっ、と握りしめるように手に力を込める。

「言ってくれなきゃ、分かんないよ。」

「嫌だ、お見合いなんて、しないで…っお願いしま、あゆかわ、さ…」

顔と同じで、ぐしゃぐしゃになるばかりの言葉。みっともない泣き声が、少し響いた。

「ね、柳ちゃん。俺のこと…好き？」

「分かってるくせに、聞くんですか。」

「うん。」

この人には、きつと一生敵わない。

「…好き、です。大好き、…」

繋いでいた手を引っ張られて、ぽす、と鮎川さんの胸に引き込まれる。

手は繋がったまま、空いた手で髪を優しく撫でられた。

「…柳ちゃん。」

ゆっくりと顔が近づいてきて、ぎゅう、と目を瞑る。

ぱちんっ

額に、軽い衝撃と、けたたましい笑い声。

「かわいー！ふふ、引っかかった。」

いわゆる、デコピンという、下らないものに…僕は引っかかってしまったらしい。

「もう知りません！」

せつかく勇気を振り絞ったのに、こんな風に茶化されて、腹立たしくて、悲しくなった。

手を振り払って鮎川さんから顔を背ける。

トントン

肩を叩かれて、苛々しながら振り返る。

「なんです——」

僕の言葉は、鮎川さんの唇で塞き止められた。

「…引っかかった。」

ああ、もう、だから…

(そんなに綺麗に笑わないで)

後日談

社長室には、二つの湯気を上げるコーヒーマグ。

「…で、結局部長さんの言う通り動いたって訳かい？」

「社長だって応援してたでしょうに。」

「自然の成り行きを見守っていたんだよ。」

「これも必然と思えば良いでしょう？」

社長と呼ばれた男は釈然としない様子で専務を睨み付けた。

「嘔吐きめ。娘なんていないくせに。」

「はいはい。私には貴方だけですよ。」

「…減給してやる。」

「怖い怖い。」

…そんな会話があったとか。

リクエスト4（後書き）

いつもリクエストありがとうございます、フランクキーさん。
もとい、私の友人さん。

ご希望には添えましたか？

閲覧感謝です。

リクエスト5 (前書き)

朱雀卍さんからのリクエスト

戦国BASARA

より、

佐助×政宗

リクエスト5

大将と竜の旦那は自他共に認める好敵手。

蒼紅永劫なんて言われてて、俺様としてはちょっと複雑。

だって、それってさ、俺様に入る隙間がないってことじゃん？

大将のオマケみたいにしないでよ。

アンタ、自分が誰の物かもう忘れちゃったの？

「Hey、猿。」

「なに。」

語尾を上げずに、首も傾げずに、ただ見下ろす。

俺似組み敷かかれている竜の旦那はとっつても不機嫌そうに俺様を睨んでいた。

アンタの目、好きだよ。でも、その目じゃない。

「何じゃねえよ、退け。」

「嫌、って言ったら…?」

「力尽くでも。」

思わずぷつと吹き出してしまった。

それを見て、もっと顔をしかめる竜の旦那。

「Ah?何笑ってやがる。」

「ははっ、やー…ごめん、こんなに簡単に押し倒されてるのに、って思っちゃって。」

ホント、笑っちゃおうよね。

俺様

こんな、一人の人間に執着するなんて掟破りも良いところ。

元々忍んでないから掟がどうか言える立場じゃないけど、

それでも、もっと上手く感情を隠せてると思ってた。

正直、むりだわ。

首筋の辺りに顔を埋めて、そのまま動くのを止めた。

血と汗と、硝煙の匂い。死臭。

俺様と、おんなじ。

気がついたら、その真っ白な首もとに噛み付いていた。

ぶつ、と歯が肉を突き破る音がして、真っ赤な鮮血が色を付ける。

赤

朱

紅

「こんな時まで、邪魔しないでよ…」

ねえ、大将。

俺は、アンタの忍だけど、譲れないものだってあるんだから。

ホント、笑っちゃう。

我を忘れたように、ただひたすらにその紅を舐めとって、飲み下す。

その色で竜の旦那を染めないで、なんて、馬鹿馬鹿しい。

ごく、ん

舌を這わせるたびにびくりと竜の旦那の体が跳ねた。

かーわいー

満足げにその様子を眺める。

キツと鋭い眼光が俺様を貫く。そう、その目が好きだよ。

アンタが見るのは、俺様だ。

じわり、と紅が滲む程度になってきたら、そこに口づける。

鬱血するくらいに吸い上げれば、暗赤色を中心に、花が咲く。

この赤なら、嫌いじゃない、かも。

「Stop!! いい加減にしる!」

髪の毛を掴まれて、引き剥がそうと引っ張られる。

つとに、これで禿げたらアンタのせいだよ。

「そんな顔して言われても、嫌がってるようには見えないけど？」

頬を染めて、運動した訳でもないのに息が上がってる。

それを指摘してやれば、口をパクパクとさせて顔を逸らされた。

こっち向いて。

「まったく…血で盛ってんじゃねえよ、猿…」

「竜の旦那もでしょ？」

ごめんね、と軽く謝りながら退こうとすると、胸ぐらを掴まれて

引き寄せられる。

澄んだ眼が、その中に欲の色を隠しもせず、俺様を映す。

「責任取ってけよ？」

「…仰せの俵に、ってね。」

リクエスト5（後書き）

サスダテ難しい！

とにかく伊達さんが難しい！

はい、白状します、正直伊達さん苦手です。

グダグダで申し訳無い。

リクエストありがとうございました。

リクエスト6 (前書き)

桜耀さんからのリクエスト

戦国BASARA

より、

家康×三成

リクエスト6

学バス設定。

ふわりと香るのは、イチゴの香り。

甘くて酔ってしまいそう。

放課後、教室内は自分一人だった。皆、部活に行ったり帰宅をしたのだろう。

生徒会の無い私は、家に帰るバスが来るまでの間、ここで時間を潰す。

図書館へ行くかどうかとも思ったが、今日はやめておいた。

ガラスと扉が開き、けたたましい声と共に誰かが入って来る。

「宵闇の羽根のか…た？はねっ！？占いでは確かにここに居るって出たんですが…！！」

キヨロキヨロと教室内を一通り見回すのは、115の鶴姫だった。

騒がしいと一言文句を言ってやるうと立ち上がる。

「あ、石田さん。」

「あ、石田さん、じゃない。ここに風魔は居ない、早急に自分のクラスに帰れ。」

「うう〜…でも確かにここって出たんですよ!」

「知った事か。」

「はっ! もしや…!」

訝しげな表情で見上げられ、なんだと首を傾げる。

頼むからさっさと帰ってくれないだろうか。

私は騒がしい女子のノリとやらについていけない。

「…宵闇の羽根の方、石田さんに化けるなんてしてませんよね?」

「馬鹿か貴様は。私はどう見ても私だろう。」

「それはそうなんですが、ちょっと確認させて下さい!」

ぐわし、と両頬を掴まれ、思わず啞然とする。

馬鹿だ、馬鹿が居る。どうかしないといけない馬鹿が…
ぐにぐにと縦横斜に引つ張られ、流石に手を叩き落とす。

「むむ…やっぱりそれはマスクじゃないんですね。」

「当然だ。」

「それにしても、唇が乾燥してカサカサしてますよ？」

「余計なお世話だ。」

「お邪魔しちゃったお詫びに、これあげます。」

手提げから取り出したのはまだ開封されていないリップクリーム。

「男がつけるものでも無いだろう。」

「そのまま放って唇が切れちゃっても知りませんよ？」

強引に押しつけられ、突き返そうとすれば、既に廊下で手を振っていた。

「ではっ、私は宵闇の羽根の方を探さないといけないのでッ!」

女というものは面倒くさい。そして押しが強い女には関わらない方が良い。

これが今日、私が学んだことだ。

くそ、どうしろと言っんだ、これは…

誰かに押しつける事もできたが、唇がカサついているのは知っていたし、

捨てるのも悪いとってしまった。

一応、周りを見回してから包装を破る。香り付き、という文字が真っ二つになった。

蓋を外してやると、自分の周りいっぱいイチゴの匂いが漂い始める。

その甘ったるい匂いに顔をしかめつつ、唇にそれをあてがった。

色も味もついていないのに、匂いだけがしつこくまとわりつくようで、

すぐにも拭ってしまいたくなった。

がらっ

再び扉が開き、またあの女かと思って振り返れば、別の人物が立っていた。

「ああ、やっぱりここに居たんだな、三成！」

「家康か、何のようだ。」

もう秋も深まってきたというのに、片腕を捲っていて寒くはないのだろうか。

心配している訳ではない。うつされたら嫌だという意味だ。

「？何をブツブツ言っているんだ？三成。」

「いや…なんでもない。」

首を横に振ってから緩く傾げる。

「で、何の用だ。」

「一緒に帰ろう！」

「……………許可しよう。」

雲行きも怪しくなってきた。

バスで帰るよりもコイツの自転車の方が早いし、何より代金が掛からない。

自分に言い聞かせて、鞆を持ち隣を抜ける。

ふわり、とまたあの香りが私に合わせて移動した。

「ん？甘い匂いがするな。」

「ああ…さつきリップクリームを塗った。要るならやるぞ？」

「良いのか？」

「私が持っけていても仕方無いだろう。それに、匂い付きだった。」

ぼい、と無造作に家康の手にそれを置く。

じゃあ遠慮無く、と蓋が開けられ、家康の口に近づいていく。

ふと家康が動きを止めた。

なんだ、やはり要らないのか？

「間接キスだな、三成っ！」

「なッ……！！馬鹿か貴様は！やはり返せ……！」

「嫌だ、絶対に返さない。」

「イイエエエヤアスウ……！」

騒がしく通り過ぎていく二つの影を、

とある無口な新聞部員がベランダで見送っていたことを、二人は知らない。

後日

「貴様ッ……！まだそれを使っているのか！」

「使い切るつもりだ。」

「今すぐに捨てる！斬滅されたいか！」

イチゴの香りがする度に怒声が響き渡ったとか。

(なんなら、ワシが口移しで塗るっか?)

(イイエエエエアスウ!!)

(ほら、叫ぶから唇が切れた)

(ま、待てッ!)

(許可できないな)

香り一つに反応して、振り返ってしまっ自分が恥ずかしい。

同じ香りだと、ずっと一緒に居るみたい。

近くに居ても、離れていても、必要以上の意識をしてしまう。

そんなものです。

リクエスト6（後書き）

なんぞこれ。 またも、なんぞこれ。
ここで一句。

甘々を 目指したはずが 空回り

桜耀さんリクエストありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9874x/>

ローケットは二度笑う。

2011年11月20日19時33分発行